第5章　総　括

梅田萱峯遺跡１区では弥生時代中期後葉に帰属する遺構・遺物が多数確認され、調査区が位置する丘陵上に当該期の集落が展開することが明らかとなった。あわせて同集落の墓群であろう木棺墓・土坑墓も検出しており、集落と墓の両者をセットで捉えられたことは周辺地域における当時の社会構造を考える上でも重要な成果を得たといえよう。

そこで、弥生時代中期後葉の遺構・遺物について若干の分析と検討を加え、梅田萱峯遺跡における弥生集落の様相を探っていくこととする。

第１節　弥生時代中期後葉の土器群について

今回の調査で弥生時代中期後葉の土器が遺構内から多量に出土した。廃絶した住居や土坑内に一括廃棄された状態のものが複数あり、各器種の概要も把握可能な資料と考える。そこで、出土した土器群について形態分類を行い、その編年的位置づけを試みる。

（１）形態分類

＜甕形土器＞

Ａ類　口径 20 ㎝以下、器高 30 ㎝程度の中型甕で、頸部に指頭圧痕貼付突帯をもたない。口縁部の特徴からＡ１～Ａ４類に細分する。

Ａ１類　口縁端部に文様を施さないもの（212 等）。

Ａ２類　ほとんど拡張しない口縁端部に凹線をめぐらせるもの（10・48・49・97・108・110）。

Ａ３類　わずかに上下に拡張もしくは肥厚させた口縁端部に凹線をめぐらせるもの（66・85・86・143・155・171 など）。

Ａ４類　上下に拡張もしくは肥厚させて断面Ｔ字状を呈す口縁端部に凹線をめぐらせるもの。（149・182・189・190）。

Ｂ類　口径 20 ㎝以下、器高 30 ㎝程度の中型甕で、頸部に指頭圧痕貼付突帯をもつ。口縁部の特徴からＢ１～Ｂ３類に細分する。

Ｂ１類　ほとんど拡張しない口縁端部に凹線・刻目等文様を施すもの（33・34）。

Ｂ２類　わずかに上下に拡張もしくは肥厚させた口縁端部に凹線をめぐらせるもの（30・92・101・111）。

Ｂ３類　上下に拡張もしくは肥厚させて断面Ｔ字あるいは逆Ｌ字状を呈す口縁端部に文様を施すもの（32・31・79・15・16・119・150・151 等）。

Ｂ４類　上下に拡張もしくは肥厚させて断面Ｔ字あるいは三角形状を呈す口縁端部に文様を施し、口縁部と同一の粘土帯の一部を施文して圧痕文突帯とするもの（130・139・159）。

Ｃ類　口径 25 ㎝前後、器高 50 ㎝前後となる大型品。頸部に指頭圧痕貼付突帯をもつ。口縁部等の特徴からＣ１～Ｃ３類に細分する。

Ｃ１類　肥厚させた口縁部に刻目を施すもの（61）。

Ｃ２類　上方へ拡張させて逆Ｌ字状を呈す口縁端部に凹線をめぐらせるもの（50）。

Ｃ３類　上下に拡張もしくは肥厚させて断面Ｔ字あるいは三角形状を呈す口縁端部に凹線文・刻目を施し、頸部に圧痕文突帯を貼り付けるもの（60・88・118）

Ｃ４類　上下に拡張もしくは肥厚させて断面Ｔ字状を呈す口縁端部に凹線文・刻目を施し、頸部にめぐらせた粘土帯に施文して圧痕文突帯とするもの（95、60・127 ？）。

Ｄ類　　口径 25 ㎝前後、器高 50 ㎝前後となる大型品。指頭圧痕貼付突帯をもたない（211）。

Ｅ類　　口縁の端部をわずかに内湾気味につまみだすもの。頸部は内面に稜をもつほど鋭く屈曲し、胴部は丸みをおびて大きく張る。（51・52）

＜壺形土器＞

Ａ類　外反する口縁部を水平方向に引き出すように拡張する広口壺で、口縁端部には凹線文をめぐらせる。口縁部の形態と大きさからＡ１・Ａ２類に細分する。

Ａ１類　口縁端部を上下にわずかにつまみ出す中型の壺（81・128）。

Ａ２類　口縁端部が下方へ拡張し肥厚する大型の壺（114・121）。

Ｂ類　外反しながら立ち上がる口縁部をもつ広口壺。概ね口径 22 ～ 25 ㎝を測り大型品とみられる。口縁の外反度と端部の特徴からＢ１～Ｂ３類に細分する。

Ｂ１類　やや細い頸部から大きく外反する口縁部をもつもの（74・112・113・145・180 など）。

Ｂ２類　緩やかに外反して立ち上がる口縁端部をつまみ出すように拡張するもの（59・64・96）。

Ｂ３類　緩やかに外反して立ち上がる口縁端部を拡張させ面をもつもの（39・40・41）。

Ｃ類　肩部から短く立ち上がる頸部をもつ壺で、口縁～頸部の特徴からＣ１～Ｃ３類に細分する。

Ｃ１類　屈曲する頸部から短く直線的に立ち上がる口縁部をもつもの（210）。

Ｃ２類　口縁部が外傾しながら立ち上がるもの。頸部に指頭圧痕貼付突帯や刺突など文様を施すもの（20・103・120）と施さないもの（140）がある。

Ｃ３類　口縁部が外反しながら直立気味に立ち上がるもの（186・191）。

Ｄ類　口縁端部が大きく拡張して下垂し、広い面をもつ大型の壺（90）。

Ｅ類　大きく張った胴部から頸部が外傾して短く立ち上がる直口壺（89）。

Ｆ類　胴部が算盤玉状を呈し大きく張る無頸壺。文様の有無等から F1・F2 類に細分する。

F1 類　口縁部に凹線をめぐらせ蓋留めの円孔をもつもの（132・169・175）。全体形を把握できる資料が無いが、類例からすれば台付きのものも存在する可能性が高い。

F2 類　無文で短い台のつくもの（4）。

Ｇ類　短く屈曲して立ち上がる口縁部をもつ小型壺（38・82・172・173）。

Ｈ類　算盤玉状に大きく張る胴部に長脚の付く脚付壺。脚部の特徴からＨ１・Ｈ２類に細分する。

Ｈ１類　脚部外面に断面三角形の突帯を貼り付けるもの（42・213）。

Ｈ２類　脚部外面に凹線をめぐらせるもの（25・26・188）。

Ｉ類　短く「ハ」の字状に開く断面三角形の台をもつ脚付壺（72）。口縁部を欠く。

壺頸部～胴部

胴部中位に最大径をもち、頸部へなだらかに立ち上がる。外面調整は主にヘラミガキで、内面調整は（ヘラケズリ後）ヘラミガキとナデの両者が認められる。

＜高坏形土器＞

全体形の把握できる資料がなく、坏部・脚部で別個に分類する。

坏Ａ類　口縁を外方へ引き出して拡張させ、端面に凹線をめぐらせるもの（27・192・57）。

坏Ｂ類　口縁が内湾しながら立ち上がる浅い椀状のもの。外面の文様の有無で細分する。

坏Ｂ１類　口縁部外面に凹線をめぐらせるもの（6・28・69）。

坏Ｂ２類　口縁部外面に文様を施さないもの（125・142）。

坏Ｃ類　口縁が内湾しながら立ち上がる深い椀状のもの。端部に面をもち凹線をめぐらせる（43）。

脚Ａ類　緩やかに「ハ」の字状に開くもので、文様の有無からＡ１・Ａ２類に細分する。

脚Ａ１類　無文のもの（7）。

脚Ａ２類　脚部下半の外面に凹線をめぐらせるもの（11・69）。

脚Ｂ類　大きく「ハ」の字状に開く脚部に三角形の透孔を入れるもの。透孔の形状からＢ１・Ｂ２類に細分する。

脚Ｂ１類　貫通する透孔をいれるもの（44・77）。

脚Ｂ２類　貫通しない透孔をいれるもの（45・78・146・129 等）。

＜その他＞

以上の他に器台形土器、台形土器、手づくね土器がみられる。細長い鼓状を呈す全　体形で、筒部の上下に凹線文を数条ずつめぐらせた間に方形透孔を 2 段に施すもの（56）と貫通し　ない三角形透孔を施すもの（187）がみられる。56 は高坏脚部の可能性もある。手づくね土器には　小型の鉢状となるもの（54）、コップ形を呈すもの（9）、口縁部が片口状となるもの（73）などの　バリエーションがある。

（２）一括資料における各型式の共伴関係

では、（１）で形式ごとに細分類された諸型式が遺構内からどのような組合せ関係で出土しているかみていくこととする。

本調査区において、最も一括性の高い資料は焼失前に床面に残された SI6 床面出土土器である。それに次ぐ資料として廃絶遺構（住居・土坑）内に一括投棄された土器群があり、出土状況から判断して SI4・SK3・SK6・SK16・SK41・SK42・SK50 などが一括性が高いものと判断した。そうした遺構から出土した資料において各型式がどのような共伴関係にあるのか整理すると表 33 のとおりとなる。

これら資料個々での共伴関係は明らかとなったが各型式間の組列はどうであろうか。壺や高坏等は遺構ごとで出土状況にばらつきがあり系統立てた検討が困難であるため、最も数量的に多く、各遺構から安定して出土している甕について検討してみたい。

甕Ａ類のうち、素口縁の A1 は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）に特徴付けられるもので、口縁端部に凹線文は入らない。A2 は A1 に凹線の施文という新たな属性が付加され、端部がわずかに拡張して面をもつため、A1 と同系譜にあり後出するものと考える。A2 ～ A4 は口縁端部の拡張度による分類であり、A2（1 ～ 2 条）より A4（3 条）の方が凹線も多条化しており、中期末にかけて漸次拡張する口縁部形態の変化の方向からすれば A2 → A4 と想定できる。よって、Ａ類における型式組列は A1 → A2 → A3 → A4 と考えられる。

甕Ｂ類は頸部の指頭圧痕貼付突帯の有無で A 類と大きく分けられるが、口縁部形態等は A 類と変わらない。B1 は凹線以外に刻目も施して加飾するなど装飾性が強いという点で中期中葉段階の伝統を残す。口縁端部もあまり拡張しない。B2 と B3 は口縁部の拡張度で分かれる。Ｂ類の主要属性として

表 33　各型式共伴関係

遺構	甕									壺									高坏		その他
SI6	A2					C2			D										坏 A		
SK16	A2										B1										
SK3	A2	A3					C3							D	E	F1					
SK22				B3			C3			A2			C2							脚 B2	
SK50		A3		B3												F1	G				
SI4		A3		B3									C2					H2	坏 A	脚 B2	器台（高坏？）脚
SK35		A3									B1									脚 B2	
SK45		A3															G				
SK53		A3									B1										
SK6		A3						C4				B2									
SK44		A3			B4																
SK42		A3																			
SK41			A4	B3																脚 B2 ？	台形土器

指頭圧痕貼付突帯が挙げられるが、B4 ではそれが「貼付」ではなく口縁部を成形する同じ粘土帯の下端を施文することに代えており、形骸化している。装飾材であった指頭圧痕貼付突帯の補強材への変化が中期中葉から後葉への変遷において最も象徴的な事象であることはすでに指摘されているとおりであり（辻 1999）、B4 がより後出的な要素をもつ類型と評価できる。しかし B4 のような突帯の形態変化が口縁部の形態変化とどう連動するのかみた場合、資料数が少ないものの相関関係にあるとは言い難い。B3 の中には拡張した口縁部に刻目によってさらに加飾するものがあるし、補強材への変化のあり方も口縁～頸部の一部として予め成形される手法だけでなく、押し込むように強くナデつける手法が主体を占めている。B3 と B4 は型式的な先後関係にあるものではなく、同時に併存する可能性が高い。Ｂ類は中期中葉段階の特徴を色濃く残す B1 → B2 → B3・B4 と推定できる。

甕Ｃ類は C1 が肥厚した口縁端部の刻目による加飾と凹線文の欠如という点で中期中葉段階の特徴を兼備しており同期に位置づけられよう。C2 は全体的に加飾されず、形態的な特徴は B3 にちかいものである。凹線の施文と口縁部の拡張度から C1 より後出するものだろうが、C3・C4 との関係は不明確である。C3 と C4 の最大の違いは先述した指頭圧痕貼付突帯の成形にあり、C3 の方がより後出的な要素をもつ。以上から、ひとまず C 類は C1 → C2・C3・C4（C3 → C4）としておく。

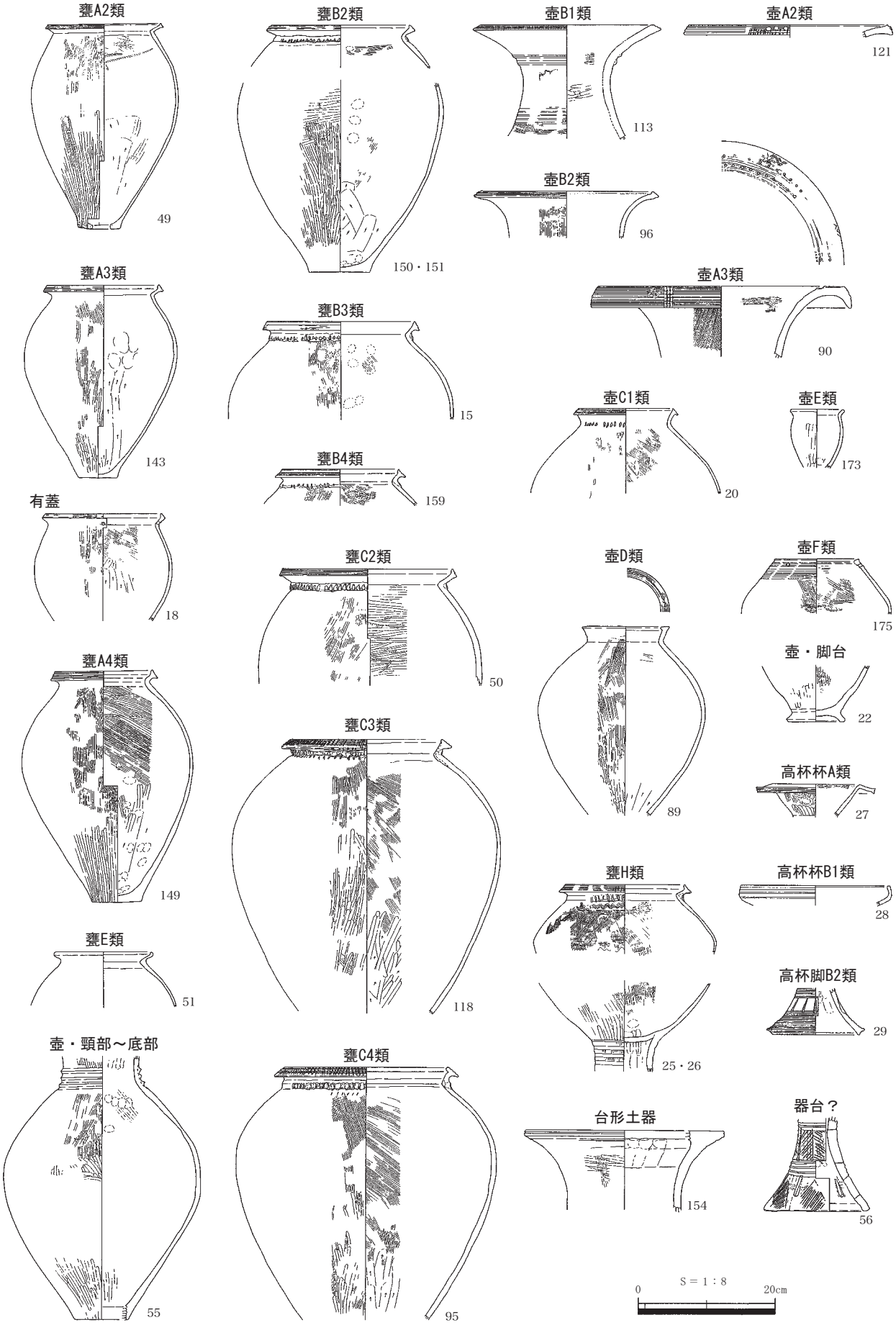
甕Ｄ類であるが、C1 と指頭圧痕貼付突帯の有無で大きく異なるものの口縁部形態や端部の文様構成は同じである。土器溜り 3 で甕 A1 と共伴しており、中期中葉に位置づけられよう。

以上で検討してきた甕形土器の型式組列における先後関係の妥当性を遺構の切合関係でも追確認したいが SK41・42 以外は該当資料がなく、その点検証が不十分である。ただ表 33 にまとめたように各型式の組み合わせ関係に大きな矛盾はなく、A2 もしくは A3 を主体として構成する一群があること、C2 は A3・A4 で構成される段階には伴わない可能性があることが確認できた。

（３）資料の編年的位置づけ

（２）の検討により、甕形土器は中期中葉に比定される A1・B1・C1・D を除き、それらに後出する A2 ～ A4、B2 ～ B4、C2 ～ C4 が拡張した口縁部端面への複数条に及ぶ凹線の施文、肩部以下の無文化、内面調整におけるヘラケズリ（放し）といった特徴から中期後葉段階の資料と考えられる。他の器種では中型の広口壺 A2、大型の広口壺 B1・B2、壺 C1・直口壺 E・無頸壺 F1・脚付壺 H2・小型壺 G、高坏坏 A・脚 B2 が共伴することが明らかで、これらも中期後葉に属するものといえよう（第 135 図）。ではこれまで検討にあげられた資料は中期後葉のどの段階に位置づけられるのか。

中型甕 A2・A3・B2・B3 は口縁端部の拡張度が低く、凹線も 3 条以下となる。中期後葉段階の甕類



第135図　弥生代中期後葉（Ⅳ-1）の土器群

の内面調整におけるケズリがどの範囲まで及ぶかがその変遷を辿るための大きな要素として挙げられ、その点に着目すればケズリは胴部最大径まで届かず、かつケズリ後にヘラミガキを施すものもある。共伴する広口壺も口縁部はあまり拡張されず､凹線以外に刻目や円形浮文を施すなど加飾気味で、頸部に貼付突帯が残るものが一定量存在するなどⅢ様式の伝統を引き継いでいる傾向が窺える。これらの特徴は中期後葉でも古相を示すものでⅣ-1 段階のものと評価されよう。先学による既存編年（清水 1992、辻 1999、濵田 2001）においてⅣ－2 段階に比定される長山馬籠遺跡 SI01 出土資料や茶畑山道遺跡 SK54・57、青木遺跡 FSK18 出土一括資料と比しても甕類における口縁部の拡張度やケズリ（放し）位置に見られる諸属性、壺類の構成等は同期に下るものではない。高坏はきわめて部分的な資料であったり共伴関係が不十分であったりと個々での評価となってしまうが、坏Ｂ類は立ち上がりが低く浅い椀状を呈し凹線も少なく、やはりⅣ－2 段階のものとは型式的な開きがある。総体としてⅣ－1 段階と捉えて大過ないであろう。

現段階でⅣ－1 と捉えた資料群であるが、先述したとおり各型式の組合せ関係からすれば甕 A2・A3・C2・C3、壺Ａ類による組成と甕 A3・A4・C4、壺Ｂ類による組成で分かれる可能性がある。前者は形態的特徴がやや古相を示し、凹線文出現期とされるⅢ -3 様式に位置付けられる一群とも考えられるが、これについてはⅢ様式期の資料もあわせ、各型式の系譜を改めて整理したうえで再検討したい。また、後出的な要素をもつ甕 A4・B4 は全体形が窺える資料がほとんどないが、SX1・SX8 出土土器は口縁の拡張度や内面調整などの特徴がⅣ－2 段階に下るものと判断している。Ⅳ－2 段階の特徴を総体的に兼備する一括資料は認められないが、住居・土坑出土土器はⅣ－1 段階、墓壙出土土器はⅣ－1 ～Ⅳ－2 段階を示すと考える。これらについては、本調査区出土資料だけでは検証が不十分であり、前後の時期も通観して考える必要があろう。試掘および 3 区の調査結果によれば尾根南側で確認された遺構中からより後出的な特徴を持つ土器が多数出土しており、将来的には遺跡全体で検討に耐えうる資料が蓄積されるものと期待している。周辺遺跡の資料も加え、甕以外の器種における型式組列も整理してさらに検討を続けることとし、今後の課題としたい。（高尾）

【参考文献】

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』木耳社

辻　信広　1999「第 4 章第 1 節　弥生中期中～後葉の土器について」辻　信広編『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会

濵田竜彦　2001「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原 1 号墓・洞ノ原 2 号墓出土土器の再検討を中心に－」濵田竜彦編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』鳥取県教育委員会

第２節　梅田萱峯遺跡１区における集落内構成（小型竪穴と貯蔵穴について）

１．はじめに

当遺跡は調査の結果、弥生時代中期後葉（Ⅳ-1）の竪穴住居および土坑墓・木棺墓群を確認した。集落の居住域と墓域がセットで発見され、大変貴重な資料を得ることができた。また、住居跡・墓以外の遺構としては、住居跡の周辺において貯蔵穴や、平面形態が方形または長方形を呈する一辺１～２ｍ、深さ30㎝前後の浅い竪穴状の土坑（以下、小型竪穴とする。）を確認することができた。貯蔵穴においては規模や形態に違いが見られ、また小型竪穴においては、焼土面の有無、ピット・壁溝を持つものと持たないもの等の違いがみられる。また、竪穴住居・小型竪穴・貯蔵穴について調査区全体をながめると、竪穴住居の周辺には貯蔵穴と小型竪穴とが近接して配置される状況で確認されている。

本節では、当遺跡で確認された弥生時代中期後葉の貯蔵穴と小型竪穴についての形態に着目し、また小型竪穴・貯蔵穴と竪穴住居との位置関係を考慮しながら、集落内における機能と配置・構成について検討する。

なお、遺構の位置関係を検討するに当たっては、米子市（旧淀江町）・大山町妻木晩田遺跡の調査・研究の結果に基づき、竪穴住居の外側に幅３ｍ程度の周堤が存在した（高田　2003）ことを考慮に入れる。

２．貯蔵穴について

貯蔵穴として確認されたものは９基である。これらはその形態的特徴を見ると類似点を持つものがあり、掘り方断面や底面の様子に着目すると、掘り方断面がフラスコ状のくびれを有するもの（SK5、13、16、20、33、36、53）がある。これらの中で底面にピットを有するものはSK13、20である。次に掘り方断面にくびれが顕著に見られないもの（SK17、54）がある。これらは底面にピットは確認されていない。いずれの貯蔵穴も底面はほぼ平坦になっている。

これらの中で、他の貯蔵穴と比較した時に共通点以外に特異な特徴を示すものとして、SK13、16がある。SK13は階段状の構造物を据え付けていたと思われる痕跡や、上屋を支えていた柱の痕跡と思われるピットがあり、平面規模、掘り方規模は他のものを圧倒する。またSK16においては、SK13よりも規模は小さいが、他のものよりやはり規模が大きめで、開口部近辺に、上屋を支えていた柱の痕跡と思われるピットが確認されている。また、底面には貼床が施されており、他のものと大きく異なる点である。貯蔵穴は食物を保存するものであることを踏まえると、開口部には蓋をする構造物があった方が自然である。しかし、他の貯蔵穴にはその痕跡が認められなかったことから、蓋を置く程度のごく簡易なものであったと推測する。一方、SK13・16・20は共に開口部を塞ぐための上屋の存在を窺わせるピットが存在し、比較的しっかりした造りの上屋を持っていたことが考えられ、加えて規模も大きい。SK16にあっては貼床を持つことから、この２つは他の貯蔵穴よりもしっかりした構造になるように造られ、他のものと異なる性格を持つことが推測できる。確認された状況から、集落内においては複数の住居の共同管理下にあったことを想定する。

SK33は確認できた部分は半分であるが、その様子から想定される規模は他のものよりも大きく、その存在が際立って目立つものである。上屋の痕跡や底面上にピットや壁溝などは確認されなかった

が、その規模の大きさからやはり共同管理下にある貯蔵穴と考えたい。

その他の貯蔵穴については、その規模は概ね径１ｍ、深さ 0.3 ～１ｍ程度であり、前述のものより小さい。それぞれいずれかの竪穴住居に属するものであると思われるが、所属形態は広く集落全体で考えなければならないものである。今回の調査は集落の一部分を対象としたものであり、調査区外においても貯蔵穴や竪穴住居は存在していることが十分考えられる。また、「シーズンごとに次々と造り替えられた（金関　恕　1999)」ことが考えられるため、ここでは部分的な可能性のみを指摘するにとどめておきたい。位置的関係・出土土器から考えると、SK5 は SI1 に属し、SK17・SK36 は SI3 に、SK53・SK54 は SI10 にそれぞれ所属していた可能性を示しておく。

ほとんどの貯蔵穴において、埋土中から底面付近にかけて礫・台石等と共に多量の土器が出土している。その出土状況から、遺構が廃棄された後に中へ投棄されたものであることが分かり、貯蔵施設として利用された後は、不用となったものを投棄する廃棄用土坑として利用されていたことが窺われる。同様な傾向は伯耆町（旧溝口町）下山南通遺跡でも見られ、やはり貯蔵施設として利用された後の廃棄用施設として再利用されたことが指摘されている（中原　斉　1986)。こうした点を踏まえると貯蔵穴の使用され方としては、本来の貯蔵庫として使われた後は、副次的な働きとして不用物の廃棄場所としての役目を持っていたことが分かる。

３．小型竪穴について

小型竪穴は 7 基確認された。いずれも平面形は一辺が 2 ｍ前後の方形もしくは長方形を呈し、深さは概ね 10 ～ 30 ㎝程度である。これらのものを床面上に見られる特徴で分類すると、大きく次のタイプに分けられる。①焼土面を持つもの（SK3、4、6)。②ピットと壁溝を合わせ持つもの（SK6、35)。③ピットのみを持つもの（SK28、30、31)。以上の 3 つのタイプである。

焼土面を持つものは、明らかに火を用いた何らかの活動が行われていたことを示すものである。注目されるのが、SK6 である。簡易な上屋を支えていたと思われる深さ 10 ㎝程度の柱穴と壁溝があり、ある一定の期間、何らかの目的を持って火を利用した建物であったことが分かる。焼土面の横には棒状の炭化材を含む炭化物層が厚さにして 10 ㎝程度形成されていたことから、ここで火が焚かれていたことが見て取れる。焼土面を持つタイプのものは、調査の結果からは活動の内容を窺い知るまでには至っていないが、SK6 の炭化物層を全量持ち帰り水洗選別を行ったところ、アワ・ササゲの炭化種子を確認することができた。このことから、食物を煮炊きなどする調理場として使われていた可能性がある。SK3、4 についても何かしらの生産的な活動が行われていた可能性がある。

さて、各小型竪穴の竪穴住居への所属であるが、SK3、4、6 は SI1・2 の周辺にあることから、この住居に生活していた住人が利用する施設であった可能性が高い。住居の周堤幅を考慮すると、SI1、SI2 の各住居と並存していた可能性のあるものは、SK4 は SI1、SK3・SK6 は SI2 といった構成となる。

ピットだけを有するものについては、やはり簡易な上屋の存在を想定する。いずれも竪穴住居 SI6・9・10 の周辺に位置することを踏まえると、これらの住居に住む者が所有する活動の場であったことを想定する。床面には焼土面や硬化面が形成されていないことをふまえると、長時間は利用しない施設であったことが窺われる。

本遺跡と同時期で平面形が方形もしくは長方形状を呈し、規模が同程度の土坑の類例をあたると、琴浦町（旧東伯町）笠見第３遺跡の SK1、SK17、SK57、SK65、SK84、SK100、SK119 がある（牧本　編

2004)。SK1 は②、SK84、SK100 は③のタイプに当てはまる。SK57 は壁溝のみを有し、SK17、SK65、SK119 は底面上に何も認められないものである。いずれも貯蔵施設の可能性のあるものとして報告されている。この中で SK57、SK65、SK84、SK100、SK119 は共同管理されていたものと考えられている。こうした点を踏まえると、本遺跡の②～③のタイプに当てはまるものは貯蔵施設としての機能を持つことも想定できる。また大山町（旧中山町）退休寺遺跡においては、ピットは無く、壁溝を有するものとして 2 区の SI-02 があり、5 区の SI-10 は壁溝とピットを有するもので②のタイプのものが確認されている（西尾　編　2005)。これらは報告の中では竪穴住居とされているものの、形態的特徴から類例としてあげておく。また、同遺跡の B3 区 SK-14 はピットを 1 基有し、③のタイプのものである(西尾　編　1997)。これは竪穴状土坑として報告されているもので、やはりその特徴から本遺跡のものと類似する。

本遺跡のほとんどの小型竪穴の埋土中からは、貯蔵穴と同様に多量の土器が出土している。遺構に伴うものではなく、やはり竪穴が破棄された後に投棄されたもので、SK3 において顕著に見られる。類例であげた退休寺遺跡の 2 区 SI-02、5 区 SI-10 においても、竪穴廃棄後に遺物を投棄していることが述べられている。笠見第３遺跡の SK65 においても、埋土中から床面にかけて多量の土器が出土しており､その状況からやはり投棄されている可能性が考えられる。貯蔵穴において見られたように、小型竪穴においても同様に、竪穴廃棄後には不用物を投棄する廃棄土坑としての利用形態があったことが分かる。

４．まとめ

本遺跡において確認された弥生時代中期後葉の貯蔵穴・小型竪穴は、竪穴住居を中心として 1 ～ 2 基の貯蔵穴・小型竪穴が一つの単位として構成され、この単位がいくつか集まることで集落を構成している様子を窺うことができた。さらには、本来の機能以外に、廃棄後には不用物の廃棄土坑として利用されていることが分かり、この時代においては廃絶した貯蔵穴・小型竪穴へ不用となったものを多量に投棄する習慣があったことを窺うことができた。

廃絶された貯蔵穴・小型竪穴を、廃棄物処理のための廃棄土坑として再利用する行為は本遺跡をはじめ、類例としてあげた遺跡にも共通して見られる。このことから、この時代の共通な習慣的行為として頻繁に行われていたことが窺われる。

さらには、廃棄された遺構内へ土器を多量に投棄する行為は SI4 においても見られる。SI4 においては土器と共に集落内で祭祀具として利用されていたと考えられる磨製石剣が完形で出土しており、大変注目される点である。投棄されている土器は煮炊きに利用される甕が主であり、また遺存状態は良くないものの土器片と入り混じって棒状の炭化材も確認されたことから、共同炊餐を行う祭祀行為後にそれに供された土器と共に祭祀具を投棄したものと推測される。同様な例として、伯耆町（旧溝口町）長山馬籠遺跡の SI-01 がある（益田・中原　編　1989)。やはり住居の廃棄にともない、土器が投棄されたことが述べられており、祭祀活動に伴う投棄として示されている。祭祀行為の範囲を土器や祭祀具の投棄までと考えるならば、廃棄された住居は祭祀活動の最後の場として利用される空間であったと推測され、廃絶後の竪穴住居は貯蔵穴の廃棄土坑としての使われ方とは異なる利用目的があるように考えられる。しかし、これはあくまでも推測の域を脱しえない。類例の積み重ねによる検証が必要であろう。

本遺跡においては貯蔵穴・小型竪穴が竪穴住居の周辺に配置されている様子が見られたのに対し、南に位置する３区においては顕著ではない。その反面、１区では見られなかった棟持柱を有する掘立柱建物跡が確認さている。この違いは土器型式に見られる時代の差に由来することもあろうが、１区と３区では集落内において空間の利用のされ方に違いがあり、住民の住み分けがあったことが窺われる。１区と３区の間にある２区が未調査のため、集落の様相を導き出すには課題が残るが、１区と３区に見られる遺構の配置の違いが、同じ丘陵上において形成される集落内において、そこに生活する者の格差に基づいたものであることを示すものとして考えたい。

梅田萱峯遺跡１区では、竪穴住居とそれに付属する貯蔵穴・小型竪穴が最小単位となり、これらが集まって集落を構成している様子を窺うことができた。また、竪穴住居、貯蔵穴、小型竪穴は本来の機能を失ってからは、廃棄土坑として使われる習慣があったことも見ることができた。こうした傾向は類例としてあげた他の遺跡にもみられ、弥生時代中期後葉の集落内における慣習の一つであることを感じさせるものである。

本遺跡の調査は集落の一部分であり、本来の集落の全体像を示すのは難しい。類例を交えてはいるものの、推測の域を脱し得ない部分もある。同じ丘陵上に続くほぼ同時期の２、３区の調査と報告が今後なされることで、１区でみられた集落の構成や、遺物の投棄のあり方などがより一層意味づけされることを期待したい。また、今回は竪穴住居を主遺構とし、それに付随する施設として貯蔵穴・小型竪穴について検討したが、集落の構造を考える上では竪穴住居群が構成する集団にも焦点を当てる必要があると考える。「弥生時代中期・後期には５棟前後の竪穴住居が一つの集団を形成」（濵田2006）することが考えられており、この点を踏まえて１～３区で形成される集落を考えていく中で、貯蔵穴や小型竪穴がどの竪穴住居集団に属するものであるかがより詳細に検討できるものと考える。これは、今後の課題としたい。

ここで述べたことは今後、資料が積み重ねられ検証が行われていく中で、随時検討されるべきものである。ご批判、ご叱責を乞う次第である。（淺田）

【参考文献】

濵田竜彦　2006「伯耆地域における弥生時代中期から古墳時代前期の集落構造」広瀬和雄・伊庭　功　編『弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版

高田健一　2005「集落遺跡に関する調査研究の現状と課題－竪穴住居を中心として－」平成16年度埋蔵文化財発掘技術研修会『調査研究・研修伝達過程』鳥取県埋蔵文化財センター

高田健一　2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落の復元」馬路晃祥編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会

牧本哲雄 編　2004『笠見第３遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

八峠　興　2000「弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割－東伯耆を中心にして－」『島古墳群・北里三ノ嵜遺跡・北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』（財）鳥取県教育文化財団

益田　晃・中原　斉 編　1989『長山馬籠遺跡』溝口町埋蔵文化財調査報告書第５集　溝口町教育委員会

中原　斉 編　1986『下山南通遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

西尾秀道 編　2005『退休寺遺跡・退休寺飛渡り遺跡』中山町文化財調査報告書第29集　中山町教育委員会

西尾秀道 編　1997『退休寺遺跡』中山町文化財調査報告書第10集　中山町教育委員会

金関　恕 監修　1999『卑弥呼の食卓』大阪府立弥生文化博物館編　吉川弘文館

第136図　小型竪穴・貯蔵穴配置図

第３節　墓群の形成・展開からみた集落の変遷と構造

（１）木棺墓・土坑墓の形態的特徴と構造

本調査区では、総 15 基の木棺墓・土坑墓を確認した。それらは墓壙形態や標石の有無等において改めて特徴をまとめると下記のとおりとなる。

【木棺墓】

①長方形墓壙、標石有、供献土器無：SX1・2・3・4・7

②長方形墓壙、標石無、供献土器無：SX12・13

③長方形墓壙、標石有、供献土器有：SX10・11

④隅丸方形墓壙、標石有、供献土器有：SX15

⑤隅丸長方形墓壙、標石有、供献土器有：SX6・8・9

【土坑墓】

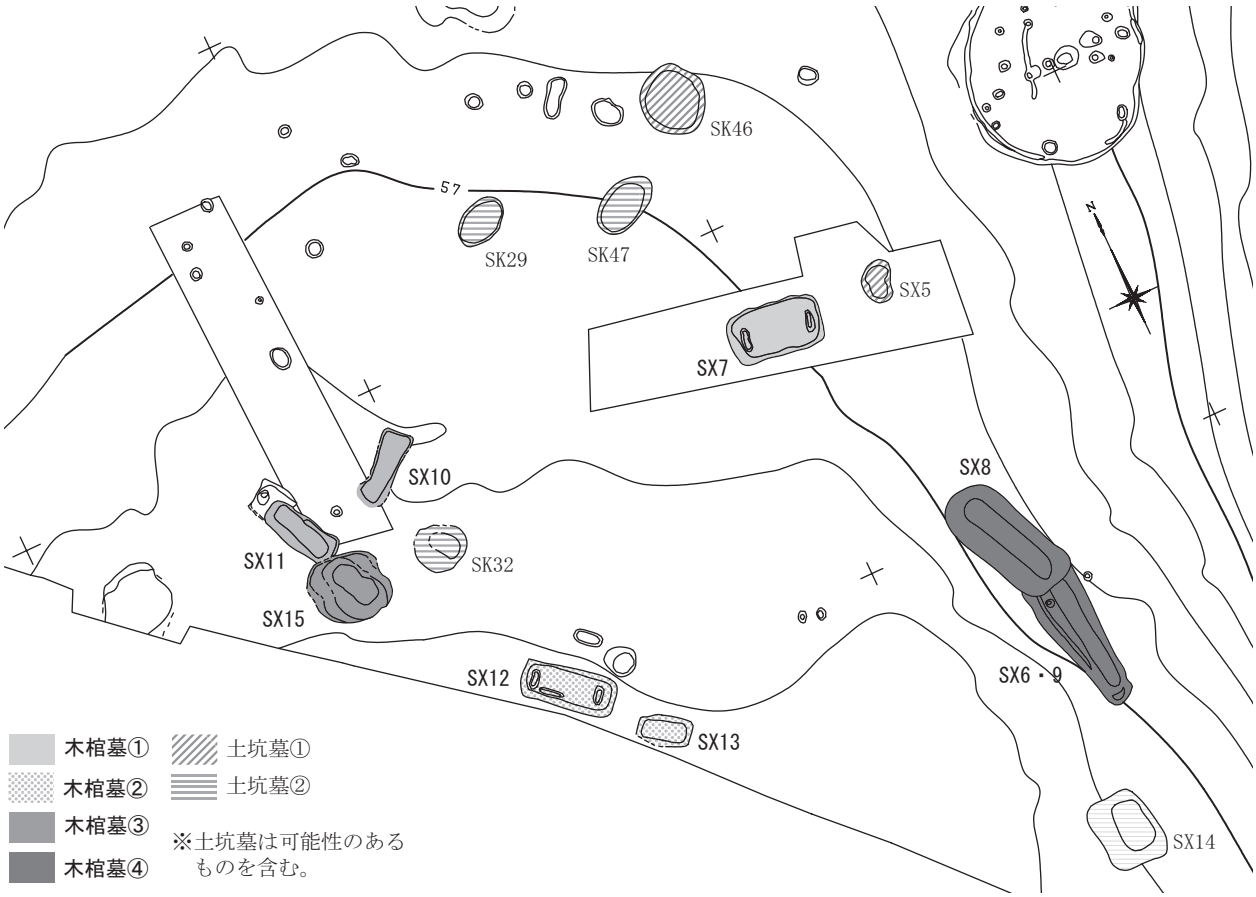
①標石有：SX5　　②標石無：SX14

木棺墓は概ね長さ 2.0 ～ 2.5 m・幅約 1 mを測る長方形状の墓壙をもつ。標石は一つのみ有すものと複数有すものがあり、調査区南側のグループがより多く設ける傾向が認められる。SX8 と SX11 の墓壙中心線上で出土した長楕円礫は標柱状の立石として使用された可能性があろう。SX15 も標石構造が特異で、墓壙形態と同じ方形プランで堀部第 1 遺跡例のような配石状となる。内部構造をみると小口板を固定するための溝を設けたもの（SX1・2・3・7・12）と溝を設けないもの（SX4・6・8 ～ 10・11・13・15）が存在する。前者の場合、埋葬施設としては組合式木棺が想定され、福永氏の分類に依ればⅠ型木棺に該当しよう（福永 1985）。後者についても墓壙と埋土の状況から形態の異なる組合式木棺が採用されたと考えられる。しかし、長軸が 3.5 m程もある大型の SX8・9 は墓壙底面が浅いU字形となり舟底状を呈し、土層断面でも通有の木棺痕跡は確認されず埋土下層の堆積は長短辺どちらもレンズ状を示す。弥生時代中期後葉という時期的な問題を孕んでいるが、組合式木棺以外の埋葬施設（例えば刳り抜き木棺等）が採用された可能性も想定しておきたい。また SX3 は両長辺沿いに石槨状に人頭大の礫を配した内側にⅠ型木棺を納め、棺内に 2 つの礫を枕石状に据えた特異な構造をとる。埋葬姿勢については墓壙規模と木棺痕跡にみる推定内法からみて、SX（6 ？・）8・9 が伸展葬、それ以外が仰臥屈肢葬の可能性があろう。一方、土坑墓としたものの多くは掘り方および土層の所見において木棺痕跡を確認できなかったもので区分は明瞭でない。ただ掘り方の形状が方形あるいは楕円形を呈す点で木棺墓のそれとは異なり、特徴の一つに挙げられよう。

（２）墓群の分布と構成（第 137 図）

さて、本調査区で確認された木棺墓・土坑墓の分布をみると、SX1 ～ 4 が各々散在状態にあるのに対し、SX5 ～ 15 は近接位置に築造されており墓群として捉えうる（以下、南群と呼称する）。

南群は広域農道によって掘削された南側の状況が不明ながらも、SX5 ～ 15 の位置関係と主軸方向からすれば全体が環状に配されていることが看取できる。南群の中には SX10・11・15 と近接する土坑 SK32 があるが周囲に木棺墓以外の遺構はみられないため、位置関係からこれも墓壙と推測でき、掘り方形状および埋土の状況からすれば土坑墓の可能性がある。同様の掘り方および埋土をもつ SK29・46・47 も環状に配された墓群の範囲内に含まれるとみることができ、土坑墓である可能性が



第137図　木棺墓・土坑墓（南群）の配置と構成

高い。SK46・47 上面で出土した円礫などは標石と想定されよう。改めて全体を概観すると、墓群は環状配置をとりつつも主軸方向は不揃いで、伝統的な環状配置から変容しているものと考えられる。

以上のように、埋葬形態としては木棺墓と土坑墓が混在し、供献土器や標石の有無そしてその厚薄など墓群の構成も複雑である。埋葬施設以外の諸要素を概観すると、供献土器や標石でいえば SX11、SX15、SX8 が厚葬の部類に属す。埋葬施設でも SX15 や SX8 などは墓群最大級の規模を誇り、両属性は相関関係にある。埋葬に関する諸要素は当然その被葬者の出自や性格を反映しており、埋葬方法から推察する集落の構造は重層的なものであったと考えられる。

（３）墓群の形成からみた集落の変遷と構造

本調査区で確認された各墓群は竪穴住居や貯蔵穴等の生活遺構の間隙に築造されており、切り合いも認められない。供献土器あるいは埋没過程で混入した土器はⅣ－１～Ⅳ－２期に位置付けられることから、尾根先端付近に分布する住居等と一時期併存していた可能性もあるが基本的に後れて形成されたと考える。過去の生活跡を忌避しつつ、空閑地にあるまとまりをもって築造されていたのであろう。南群については出土土器からすれば SX5・7・10・11 などが先行し、SX8・15 などが後出するとみられ、墓群造営時の主たる居住地は第１節で述べたように尾根南側にあると想定している。墓群の配置は変容しつつも環状を呈すなど縄文的な要素を引きずりつつ、墓制の面でも縄文来の土坑墓と新来の木棺墓を併用した可能性が高い。標石の使用、礫石使用墓の存在などは弥生時代前期の中尾第１遺跡やイキス遺跡例に類似し、後続する時期と推定される退休寺遺跡・押平弘法堂遺跡例とは墓群配置も含め様相を異にする。SX3 は中国地方東部に類例をもつ枕石習俗（福永 1987）を採用して単独で

配置され、SX8・9 では組合式以外の木棺の採用も想定されるなど多様な被葬者像が描ける(註)とともに、墓群の諸属性の検討によれば集落は重層的な構造にあることが理解された。それは被葬者の集団差であり、階層差とも評価できるかもしれないが、未だ集落の大部分が不明な現段階ではそれ以上の追求は保留しておきたい。こうした墓群の複雑なあり方は散在状態にあった中小集落がまとまり、大規模集落を形成する前夜である当該時期の社会も反映していよう。丘陵南側の広範囲に展開すると予見される集落の様相について漸次新たな知見が得られれば、本調査区で確認された墓群の被葬者像と集落構造がより明らかになると考える。（高尾）

（註）
SK34 出土の赤彩甕 138 は文様構成等が津山市ビシャコ谷遺跡例（行田裕美編　1984 『ビシャコ谷遺跡』津山市教育委員会）に近似し、胎土も在地の土器とは様相を異にする。多数出土したサヌカイトに代表される中国地方山間部を介した交流が墓制に反映されている可能性は高い。

【参考文献】
小林青樹　2000「中四国における初期弥生墓制の変容―礫石使用墓と列状墓群の動向を中心に―」『古代吉備』第 22 集
根鈴輝雄編　1988『イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
八峠興ほか編　2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
玉木秀幸編　2004『中尾第 1 遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
西尾秀道編　2005『退休寺遺跡・退休寺飛渡り遺跡』中山町教育委員会

第４節　まとめ

本調査区では縄文時代から古代までの遺構・遺物を確認している。最後に周辺遺跡の状況にも触れながら各時代を追って概観し、調査のまとめとしたい。

＜旧石器～縄文時代＞

ナイフ形石器の基部片とみられる資料が出土しており、また縄文時代早期の土器片も１点だが認められ、かなり早い時期から丘陵上が利用されていたと推測される。ただ、後続時期の遺物は晩期の突帯文土器が数点出土しているにすぎず、この時期に比定できる遺構もないため調査区周辺での土地利用は活発なものとはいえない。1 区そして南東尾根の 3 区で時期不明ながら落とし穴を複数確認しており、今後の調査によっては本遺跡の立地する丘陵上での活動内容が明らかになるものと考える。

＜弥生時代＞

弥生時代の遺物は前期後葉（Ⅰ－3 期）から認められ、尾根の鞍部にあたる箇所に土器溜り 1 が築かれる。周辺の包含層中や SI3 焼失後の流入土から同時期の土器や石鏃が出土しており、局所的な感はあるが丘陵上が利用されている。さらに、本遺跡北西部の段丘上に位置する栄田（梅田）古墳群の調査でイキスタイプ（濵田 2001）とみられる無刻目突帯をもつ深鉢が出土しており（西尾ほか編 2002)、前期中葉には丘陵周辺が諸活動の場となっていたと推測される。

弥生時代中期中葉（Ⅲ－3 期）になると谷の開口部付近に土器溜り 2・3 や P119 が築かれる。一方、先述した栄田古墳群内において中期中葉でも古相（Ⅲ－2 期）の土坑が 2 基確認されており、少量ながら中期後葉までの遺物が出土している。該期の集落が不明な状況ではあるが、中期中葉以降、生活主体が周囲の平坦な段丘から丘陵上へと漸次移動した可能性もあろう。

中期後葉（Ⅳ－1 期）には丘陵上に集落が展開し、尾根の先端にあたる 1 区でも住居や貯蔵穴が築かれる。焼失住居で出土した炭化材や土坑等の埋土から採取した炭化種実の同定結果、そして植物珪

酸体の分析結果を総合すれば、集落をとりまく環境として、居住地外縁にスダジイを主とした広葉樹林が広がり、近傍でアワやササゲ属等の畑作を行う姿が復元できる。集落は竪穴住居、貯蔵穴、そして小型竪穴によって構成されており、本調査区で掘立柱建物は確認していない。ただ、東側隣接尾根の３区で独立棟持柱をもつ掘立柱建物が検出されている点は重要で、集落内での空間分節によって計画的に建物等が配されていた可能性を示唆する。調査区内が墓域として利用され始めるのも、およそ住居群が廃絶するⅣ－１期と推測され、続くⅣ－２期まで連続して築造している。こうした土地利用形態の変化は丘陵上に展開する集落の構造変化に伴うものだが、限られた範囲での調査であり詳細は不明確な点が多い。試掘調査の成果等（小泉・石賀 2002、西尾 2004）によれば集落は丘陵の広範囲に及ぶことが予見され、今後の調査成果が期待される。

周辺に目を向けると、近接する丘陵地に中期後葉の遺跡は見られないが、やや離れて化粧川遺跡、退休寺遺跡が存在する。化粧川遺跡では径約８ｍを測る大型の竪穴建物が２棟確認され（小谷ほか編 2005）、退休寺遺跡では竪穴住居や掘立柱建物とともに木棺墓・土坑墓が検出されており、やはり集落内で居住域と画された場所に墓群が造営されている（西尾編 2005）。両遺跡とも中期後葉でも新相（Ⅳ－２～３期）に位置づけられるが、この時期の社会構造を探るための重要な資料であり、梅田萱峯遺跡の全体像が明らかになった段階で改めて比較検討する必要があろう。

調査地内に後期以降の遺構・遺物は認められないが、栄田古墳群の調査で後期前葉の土器が出土していることから丘陵周辺に活動の範囲が及んでおり、さらに後期後葉になると八重遺跡群で集落が形成され活動の拠点は丘陵南側へ移るものと想定される。

＜古墳時代～奈良時代＞

遺構は検出されなかったが、若干の遺物が出土している。遺物のうち横瓶は八橋Ⅶ期・TK209 併行に位置づけられ、図化できなかったものの中にも同期の資料が少量みられる。土師器甕の特徴なども概ねその頃に比定されよう。断片的な資料ではあるが、これらについては本遺跡北側に形成された同時期の栄田古墳群との関連性が強いと考えられる。本遺跡は栄田古墳群の後背丘陵に位置しており、被葬者層を支え、古墳群を築造した集団の居住地が近傍に存在する可能性もあろう。続く時期のものとしては断絶を挟み８世紀代となる。谷部に堆積した①～②層からは８世紀初頭～後半段階の須恵器が出土しており、同層に由来する埋土をもつピットが多数築かれ炭化物や焼土粒の集積もみられた。ピットのうち掘立柱建物等を構成するものは認められなかったが、この時期は谷部を中心に利用されていたと推測される。

以上、出土した遺構･遺物の時期を追って調査成果の概略を述べた。特に弥生時代中期後葉の遺構･遺物は当該期における周辺地域の社会を復元する上で良好な資料となろう。本遺跡は丘陵南側の広範囲に展開する可能性が高く、将来の調査に委ねる部分も大であるが、現資料においても多角的に検討すべき問題を山積みさせたままの報告となってしまった。調査担当者の力量不足を痛感するとともに、それらは今後の研究課題としたい。最後に、日々の発掘調査と整理作業に従事してくださった作業員の方々と、ご協力いただいた地元の方々に対して深く感謝いたします。

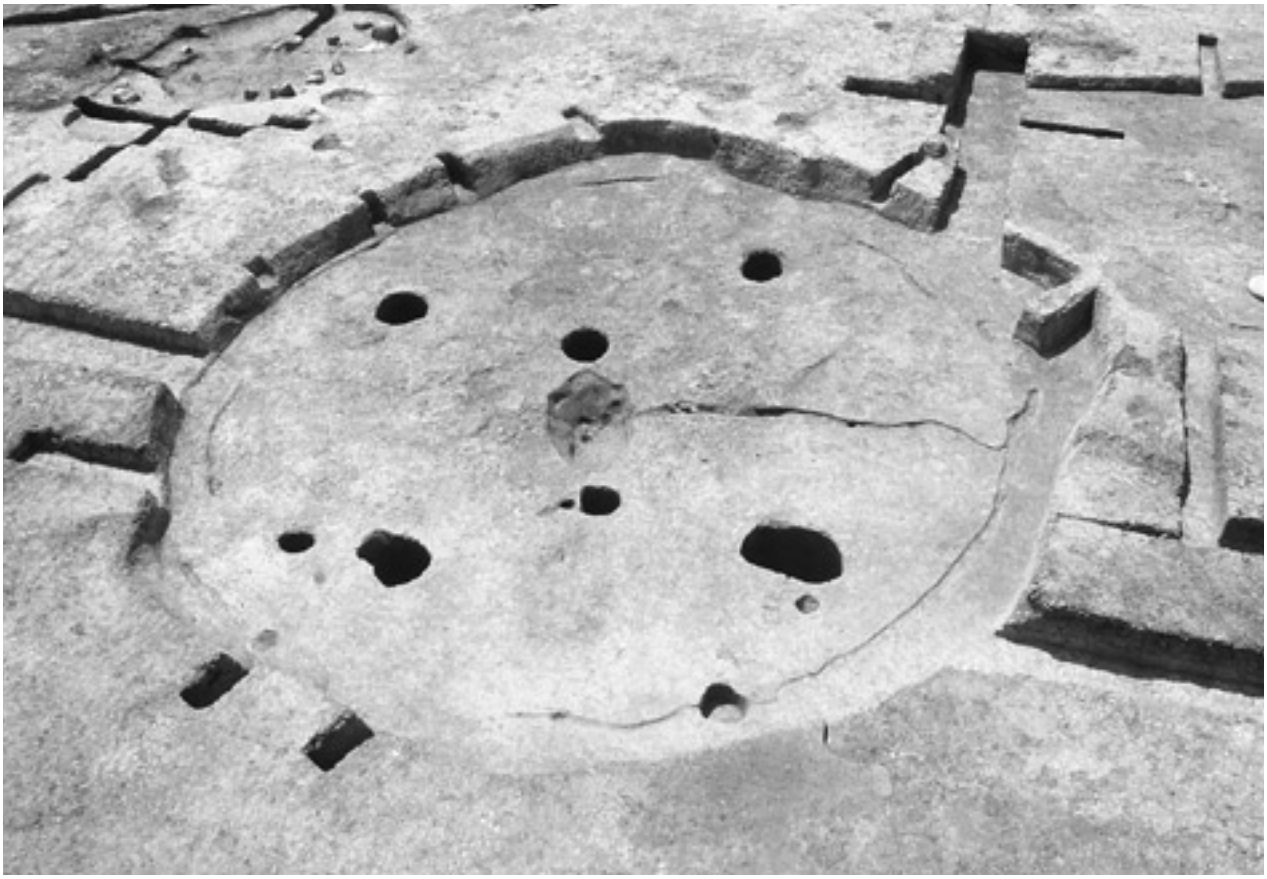
（高尾・淺田）

写 真 図 版
PLATE

調査区遠景
（北から）

１　調査区全景（東から）

２　調査区北側完掘状況



1　SI1完掘状況（南東から）

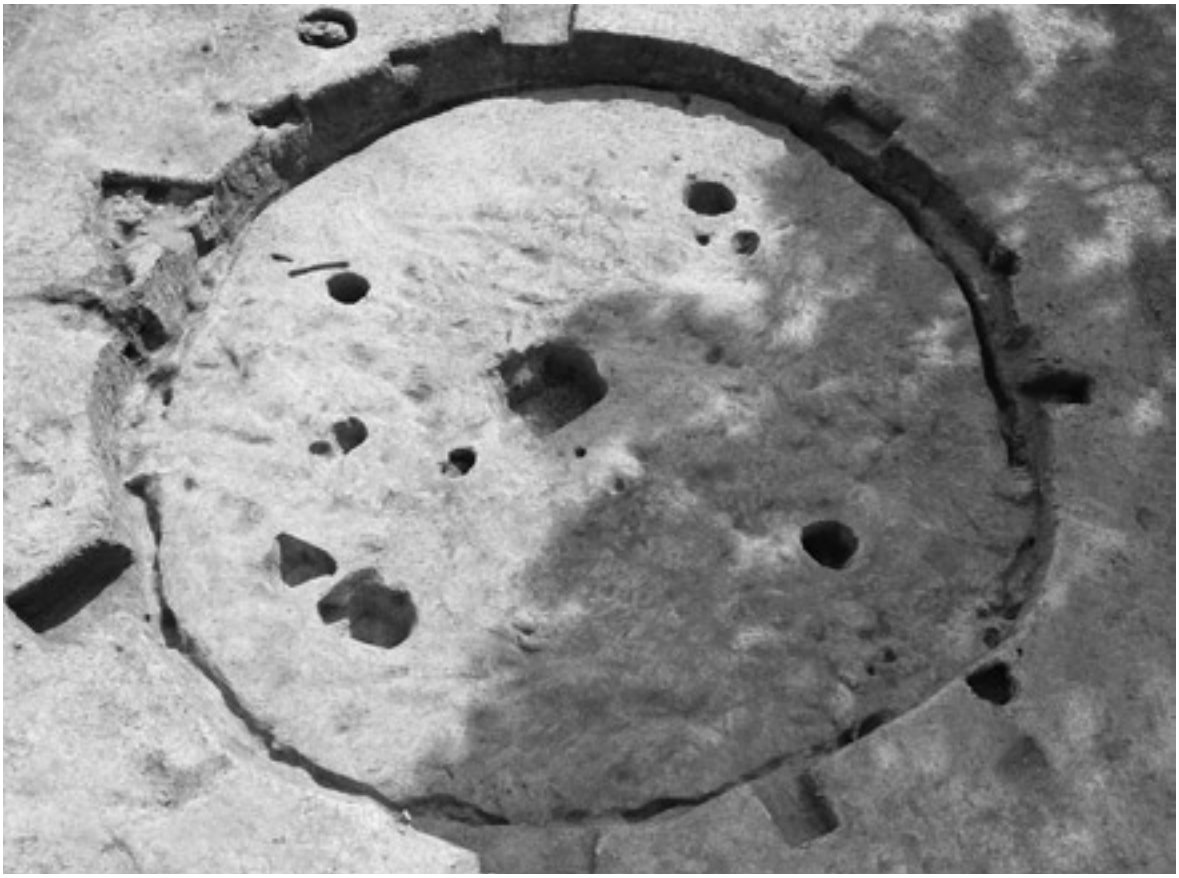
2　高坏7出土状況（北から）

3　甕4出土状況（北西から）

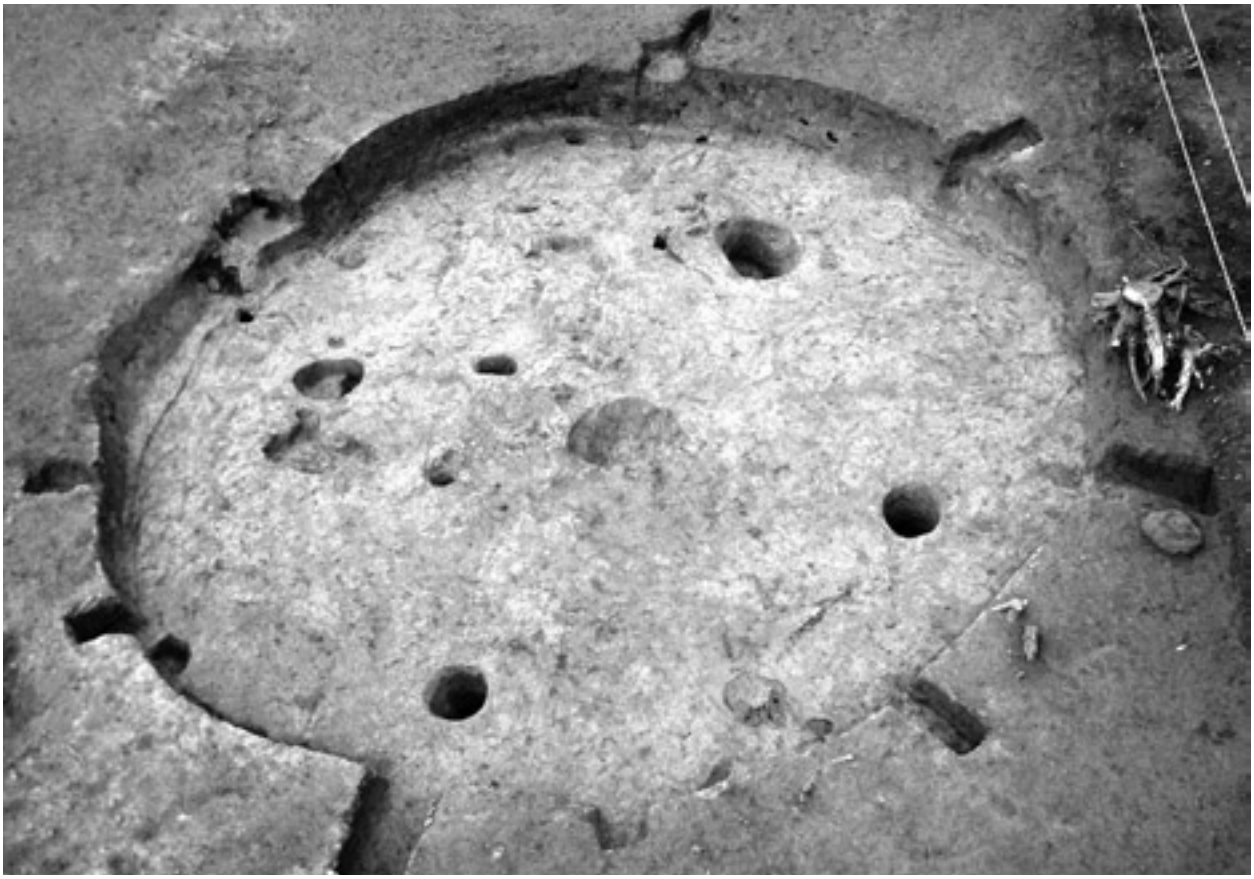
4　甕1出土状況（北東から）

5　磨石S8・凹石S9出土状況（北西から）

1　SI2完掘状況（北から）



2　SI3完掘状況（北東から）



1　SI4完掘状況（北から）

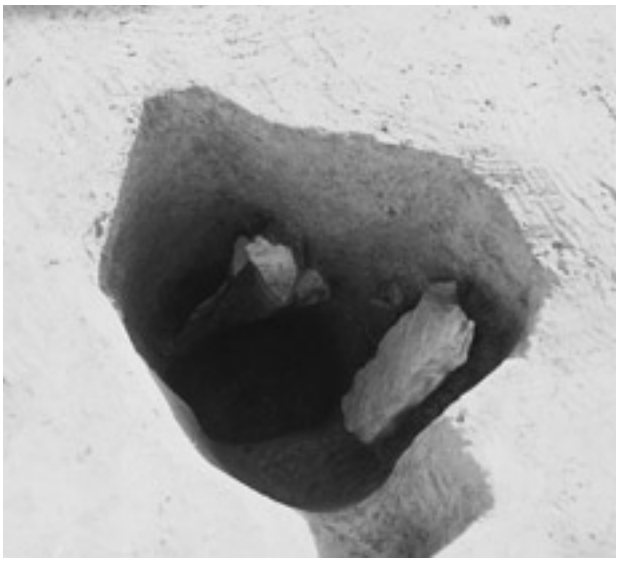
2　SI4遺物出土状況（北から）

1　SI4甕21出土状況（南東から）

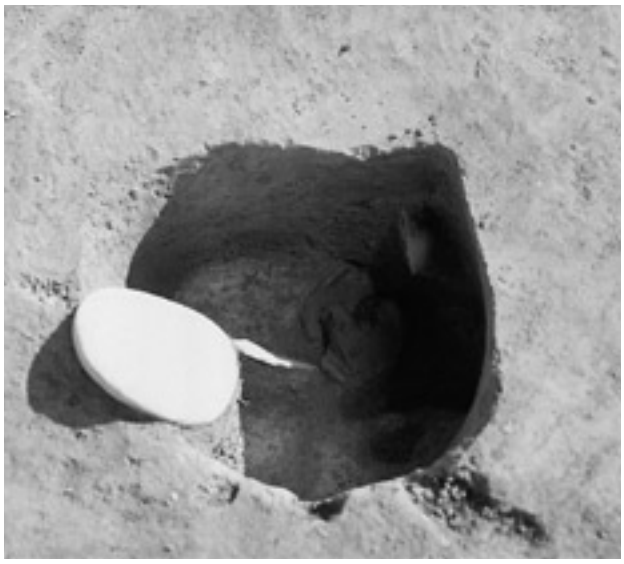
2　SI4-P2遺物出土状況（南から）

3　SI5磨製石斧S26出土状況（西から）

4　SI5剥片S21出土状況（北から）



5　SI5-P2遺物出土状況（北東から）



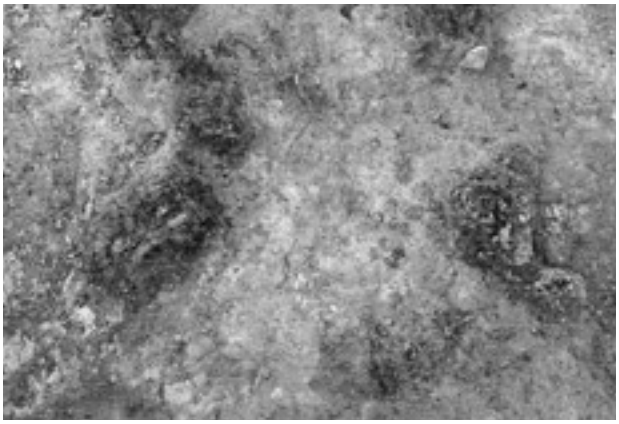
6　SI5-P3遺物出土状況（北から）

1　SI5完掘状況（北から）

2　SI5遺物出土状況（西から）

1　SI6完掘状況（北から）

2　SI6南側土層断面（西から）

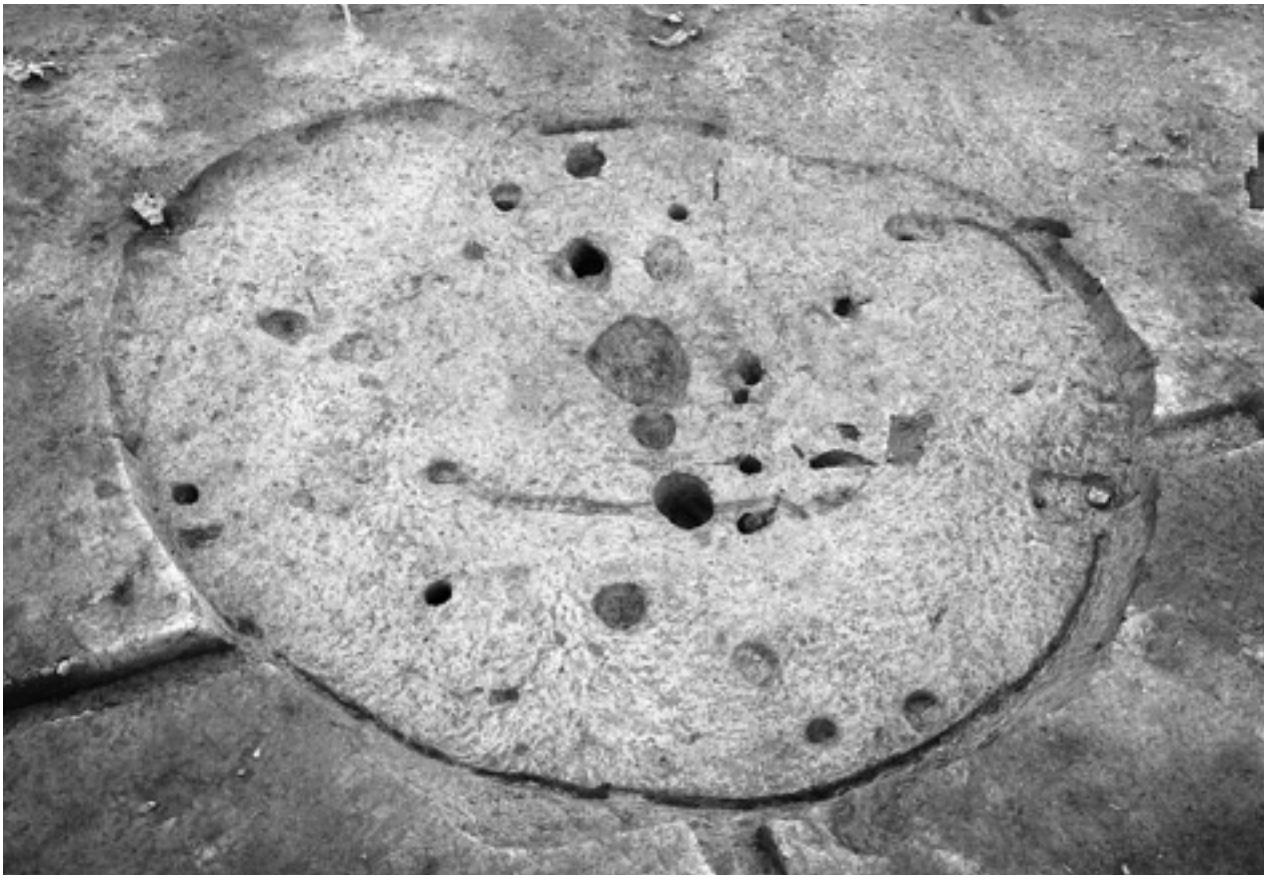


3　SI6茅出状況（南西から）

4　SI6垂木・茅出土状況（南から）

1　SI7完掘状況（東から）

2　SI8遺物出土状況（西から）

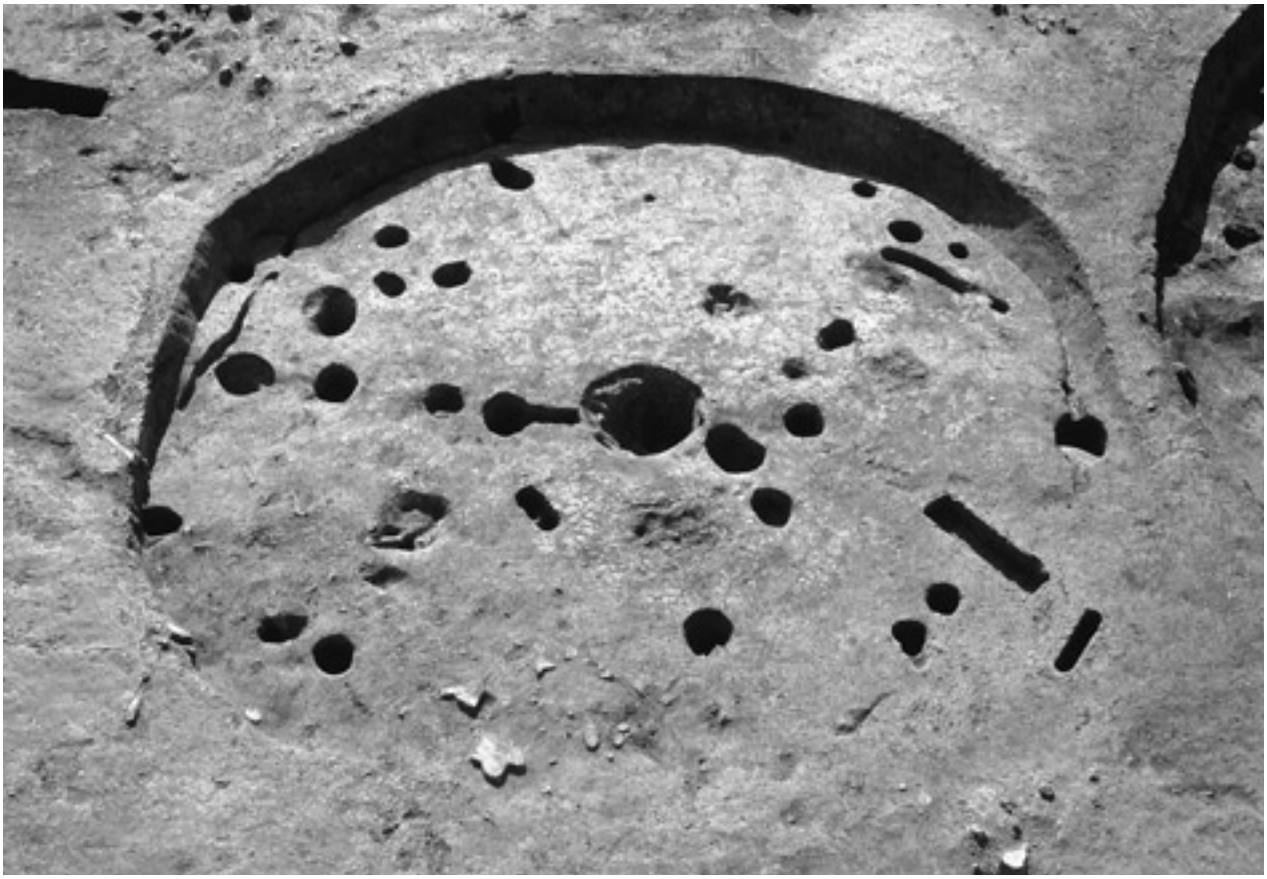


1　SI8完掘状況（西から）

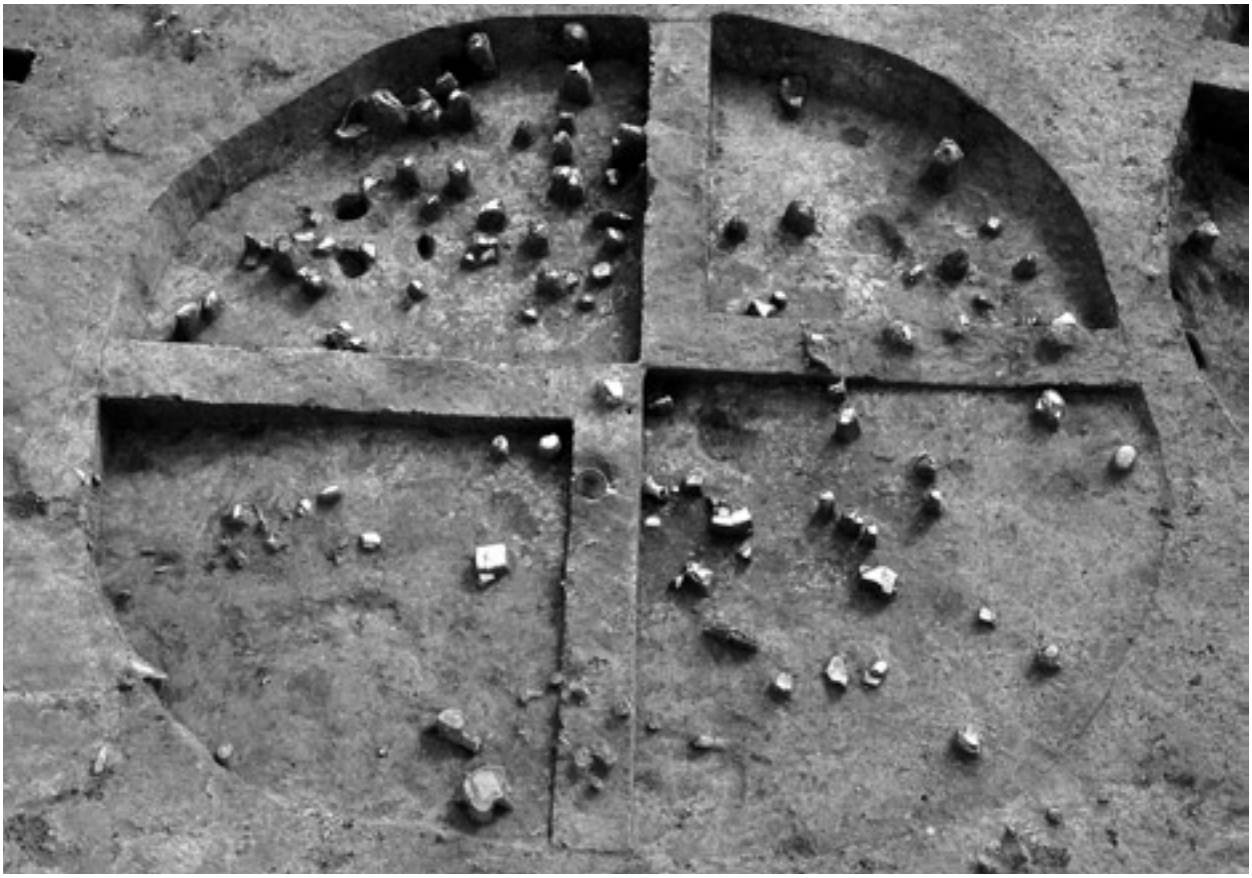
2　SI8炭化材および焼土出土状況（東から）

3　SI8磨製石斧S45出土状況（北から）

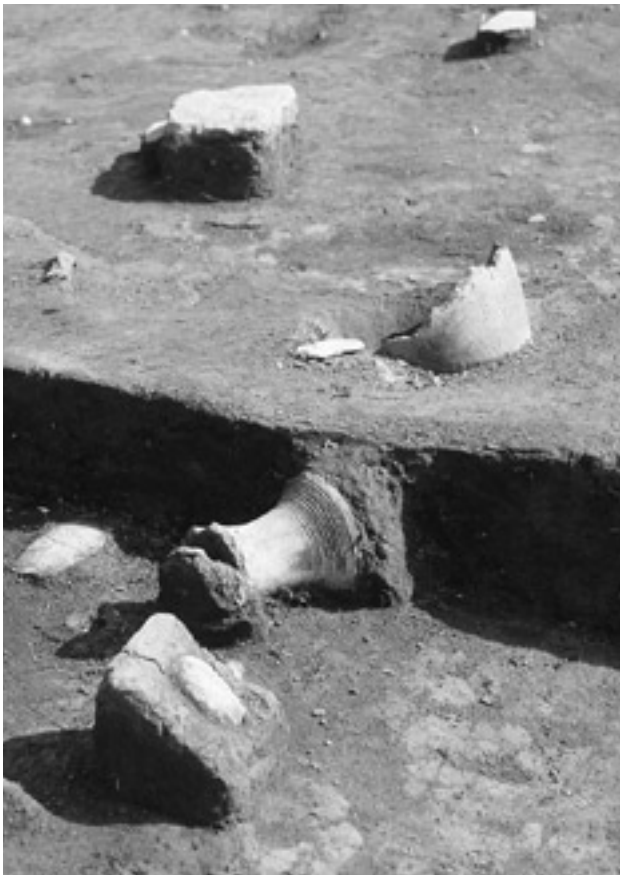
4　SI8-P3土層断面（南から）



1　SI9完掘状況（北から）



2　SI9遺物出土状況（北から）



1　SI9高坏68出土状況（南西から）

2　SI9甕66出土状況（南西から）

3　SI10完掘状況（北西から）

1　SK1炭層検出状況（北から）

2　SK2完掘状況（北から）

3　SK3遺物出土状況（北東から）

1　SK3完掘状況（北東から）

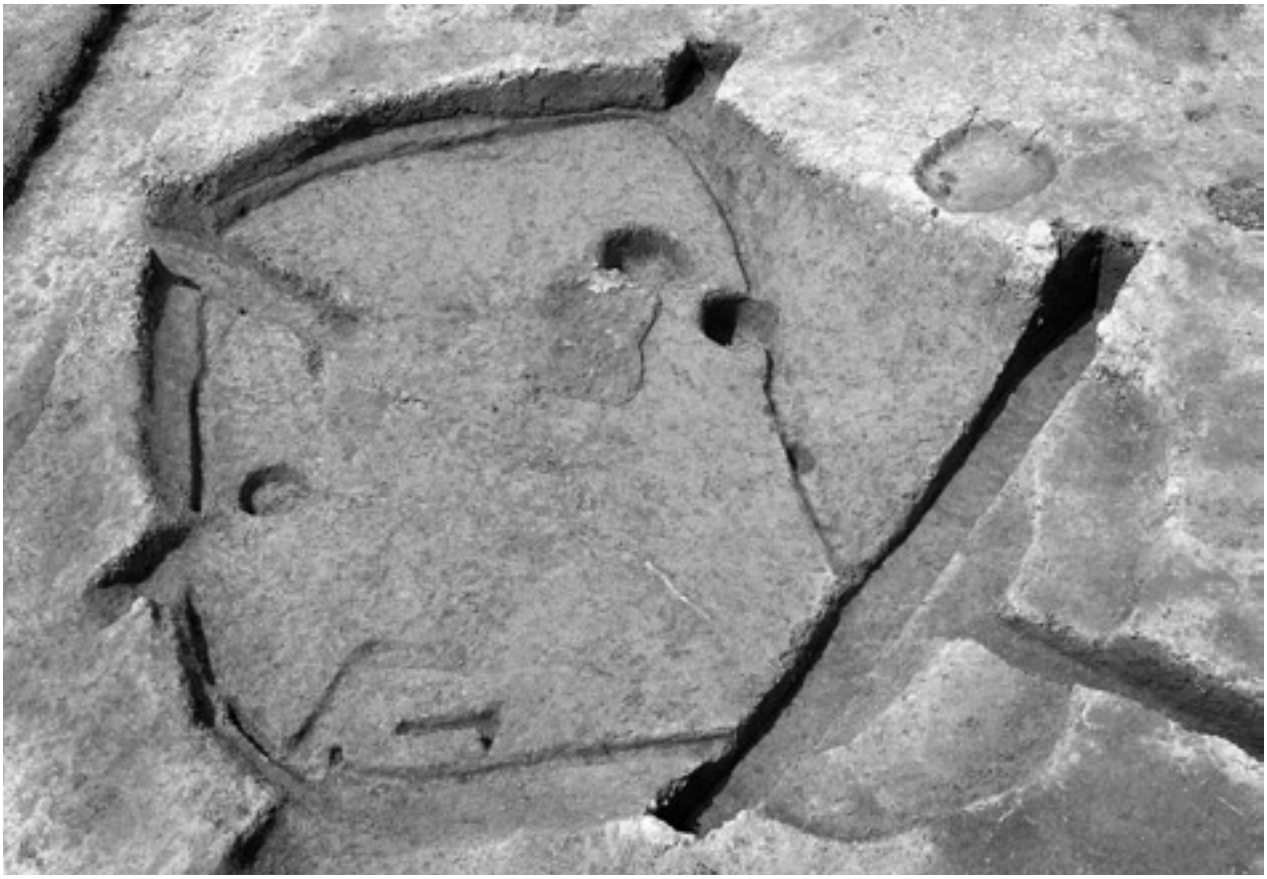
2　SK4完掘状況（南東から）

3　SK5完掘状況（南東から）

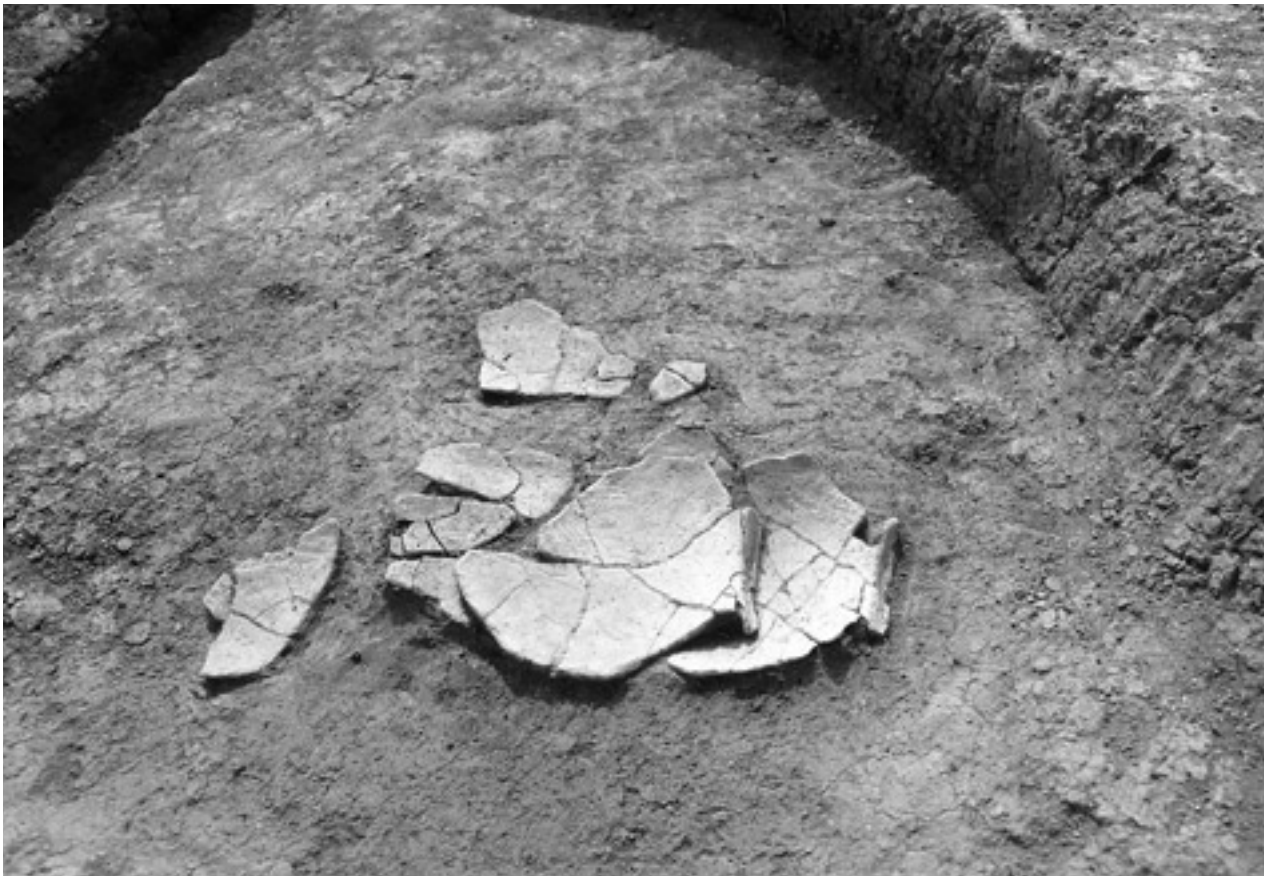
4　SK6炭層検出状況（北東から）

5　SK6炭化材出土状況（北東から）

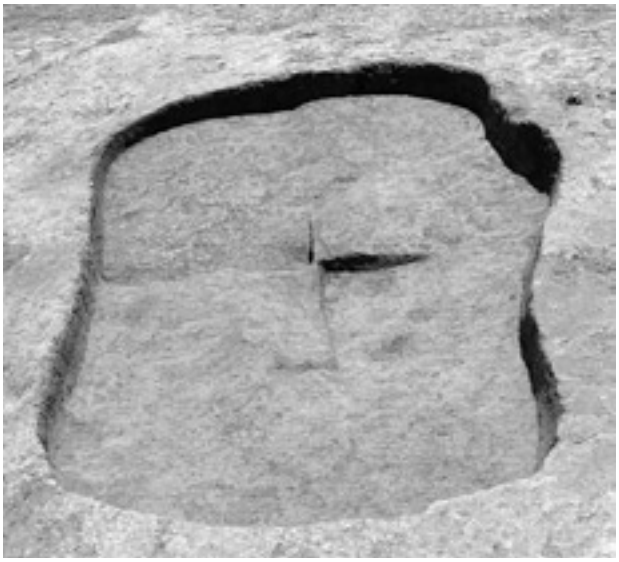
6　SK6甕95出土状況（北から）



1　SK6完掘状況（南から）



2　SK6甕94出土状況（南から）

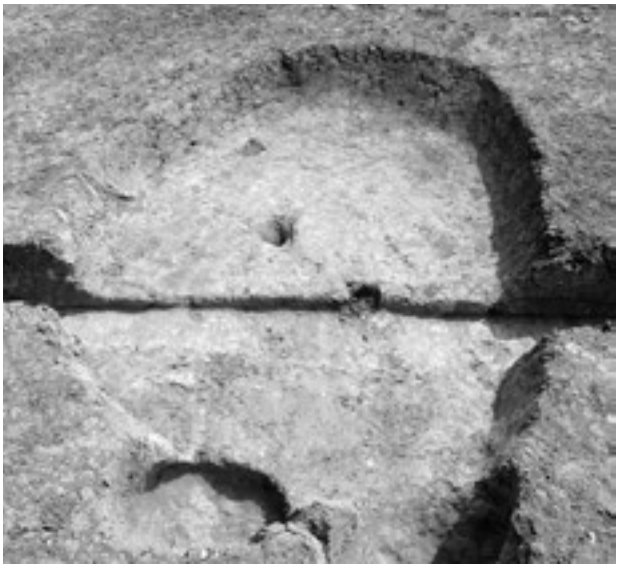


1　SK7完掘状況（北西から）

2　SK8完掘状況（北東から）

3　SK9焼成粘土塊検出状況（東から）

4　SK10完掘状況（南から）



5　SK11完掘状況（北から）

6　SK12完掘状況（南西から）

1　SK13西側土層断面（北西から）

2　SK13遺物出土状況（西から）

3　SK13完掘状況（北西から）

1　SK14遺物出土状況（北西から）

2　SK15甕92出土状況（西から）

3　SK17完掘状況（西から）

4　SK18完掘状況（西から）

5　SK19完掘状況（北西から）

6　SK23・24完掘状況（北から）

1　SK16遺物出土状況（東から）

2　SK16完掘状況（南から）

1　SK22遺物出土状況（南から）

2　SK20完掘状況（東から）

3　SK28完掘状況（西から）